



健康かわらばん

第89号 (令和2年2月号)

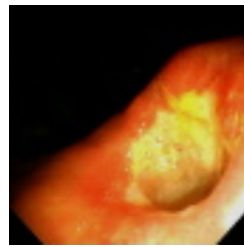
特集：胃・十二指腸潰瘍

1. 胃・十二指腸潰瘍とは？

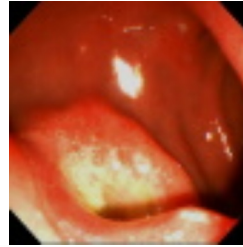
潰瘍（かいよう）とは粘膜に出来た深いキズです。消化管では胃酸の影響を受けやすい、胃と十二指腸の始まり（球部）に多く発生します。従来非常に多い病気でしたが、治療の進歩とピロリ菌感染率の低下により減少して来ましたが、高齡化とともに薬剤性の胃潰瘍は増えています。

2. 胃・十二指腸潰瘍の原因

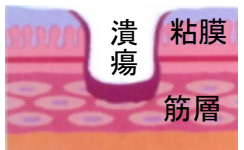
胃酸等の粘膜を攻撃する因子と、粘液や血流など粘膜を守る因子のバランスのくずれが原因ですが、近年ピロリ菌が発見され、ピロリ菌感染による慢性胃炎がその素地として重要なことが明らかになりました。ピロリ菌感染が無くても、消炎鎮痛剤（痛み止め・解熱剤）や心筋梗塞・脳梗塞の予防に使われるアスピリンなどの薬剤を内服すると、薬自体による粘膜傷害と胃の防御機構の低下により潰瘍が出来やすくなります。



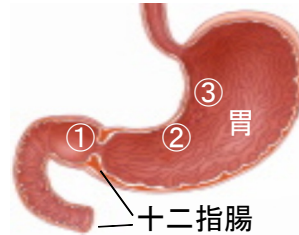
胃潰瘍



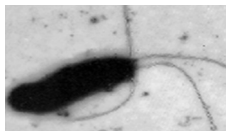
十二指腸潰瘍



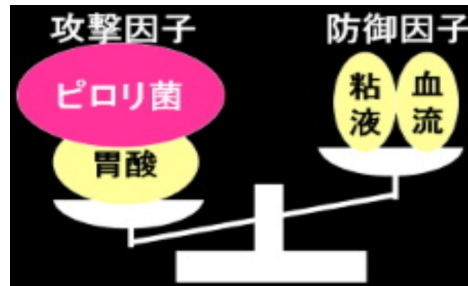
潰瘍とは粘膜より深いキズ



潰瘍の多い部位：
①十二指腸球部 ②胃角 ③胃体部（年齢とともにピロリ菌の慢性胃炎が胃の上方に進むため、若年では①、高齡では③に多い。）



ピロリ菌の電顕写真



潰瘍の主な攻撃因子と防御因子

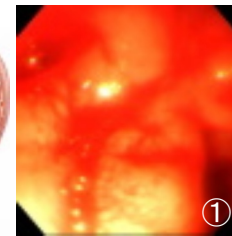
潰瘍の症状



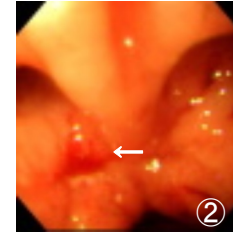
みぞおちの痛み



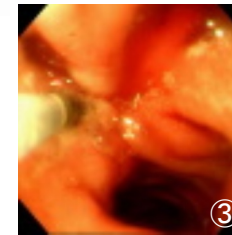
吐き気・食欲低下



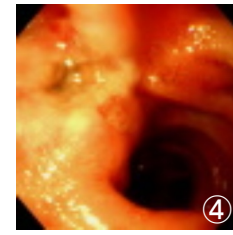
①



②



③



④

内視鏡的止血：①十二指腸球部に出血あり、②水で洗って出血点を確認、③熱凝固の器具で焼き、④止血成功。



内視鏡は潰瘍の診断だけではなく、上記の止血治療やがんとの判別のための生検（次ページ参照）にも用います。

3. 潰瘍の症状・合併症

主な症状はみぞおちの痛みで、一般に空腹時に強い傾向があります。吐き気、食欲不振、胸やけも多い症状です。重篤な合併症で最も多いのは出血で、吐物が赤くなくてもコーヒー残渣様だったり、便がタール状の真っ黒い時は出血の症状です。脳梗塞・心筋梗塞予防などで血液が固まりにくくなる薬を服用している場合には、特に大量出血の危険があります。また、潰瘍が深すぎ穴が空いてしまうと（穿孔：せんこう）、腹膜炎を起こし耐えられない激痛になり、手術が必要になる場合があります。

4. 潰瘍の診断

バリウムによるX線検査は検診以外では行われることは少なくなり、現在は主に内視鏡で診断します。みぞおちに痛みがあっても、胆のうや膵臓が原因のこともありますので、必要な時には腹部超音波検査等で除外します。

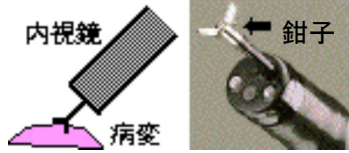
5. 潰瘍の治療

胃酸の分泌を強力に抑える薬が登場し、短期間に治すことが可能になりました。薬を開始すると2~3日で症状が無くなりますが、潰瘍が完全に治るまでは薬飲み続ける必要があります。ほとんどの人がピロリ菌を持っており、ピロリ菌の治療（除菌療法）をしないと再発する可能性が非常に高いため、除菌が完了するまで通院することが大切です。厳しい食事療法は必要ありませんが、症状があるうちは辛いものやコーヒー、炭酸飲料など刺激になるものは避けましょう。除菌が成功後も再発しやすい場合や、薬剤性潰瘍で薬剤が中止できない時には、予防的に薬を飲み続ける必要があります。

除菌と潰瘍再発率	成功	15.9%	胃潰瘍
	失敗	71.3%	
	成功	8.8%	十二指腸潰瘍
	失敗	67.1%	

6. 潰瘍とがん

胃潰瘍から直接がん化することはありませんが、良性の胃潰瘍と判別しにくいがんがあります。潰瘍が開いているうちは生検でもがんが検出しにくいいため、潰瘍が縮小した段階で再検査する必要があります。また、潰瘍の経過観察中ながんの疑いがはっきりしてくることもありますので、年に一度の内視鏡検査をお勧めします。

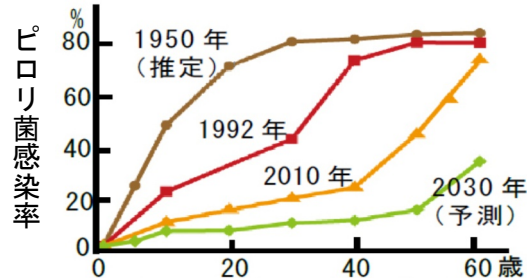


生検：内視鏡から鉗子器具を出し、病変から組織を採ります



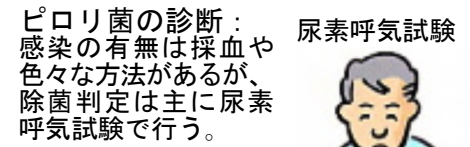
潰瘍に似た早期胃がん：矢印の部位にわずかな出血があったため、繰り返し生検を行ったところ、がん細胞が検出され診断がつかしました。

(二年以内の再発率)



7. ピロリ菌について

幼少期にピロリ菌に感染すると、菌が胃に棲みつき慢性胃炎を引き起こし、潰瘍だけでなく胃がんにも罹りやすくなります。ピロリ菌の感染率は衛生環境に関連し、若い人では低く、高齢者ほど高率です。ピロリ菌の感染診断には色々な方法がありますが、除菌治療後の判定には主に精度の高い尿素呼気試験が用いられます。



除菌療法の副作用：下痢・軟便等の胃腸症状、薬疹が多い。薬疹は体・太もも・腕に小さな赤い発疹が多発。

ピロリ菌除菌治療の流れ



以前は大量の薬を飲み毎日注射をして、潰瘍の治療も、胃酸を強力に抑える薬が開発され早期に治すことが出来、再発もピロリ菌の除菌療法でかなり防げるようになった。ただし高齢化により、整形外科疾患の痛み止めや、脳の梗塞・心筋梗塞予防の аспиリンを長期に内服する人が多くなり、薬剤性潰瘍は増えていきます。また、アスピリン以外に血液を固まりにくくする薬を服用している人も多く、潰瘍から出血した際に重症の貧血になります。赤くなくとも、コーヒー残渣様の吐物・タール便といった出血の症状を是非覚えて、早期に診断・治療を受けて下さい。薬剤性潰瘍であっても、ピロリ菌がいる場合は除菌療法が有効ですが、胃酸を抑える薬の継続も必要です。



あとがき